

シンガポール日本人学校クレメンティ校における国際理解教育

前シンガポール日本人学校クレメンティ校 教諭

茨城県稲敷市立江戸崎小学校 教諭 紺野芳子

キーワード：現地校交流，外国語活動，英会話

1. はじめに

シンガポールは、中華系、マレー系、インド系の3民族が大多数を占める多民族国家である。そのため、「中国語」「マレー語」「タミール語」と「英語」の4つが公用語となっている。標識や看板は4言語で書かれているし、MRT（地下鉄）の案内は4言語でアナウンスされる。当然のことながら、宗教においても「仏教」「イスラム教」「ヒンズー教」がある。仏教寺院のすぐ隣にヒンズー教寺院が建っていたり、ひとつの敷地の中で3宗教を祭っていたりする寺院もある（この寺院は地元でも有名な場所である）。祝日も3宗教における祝日が設定されており、日本人学校も原則としてシンガポールの祝日に沿って休業日が設定されている。

シンガポールにおける日本人の割合は（経済危機直後には若干減ったようであるがすぐに回復した）、年々増えている。シンガポール日本人学校小学部はクレメンティ校とチャンギ校の2校があり、約600人ずつ、1200人程度が在籍している。

2. クレメンティ校における国際理解教育

全学年ともに、現地校との交流が年間計画の中に位置付けられている。訪問しての交流・招待しての交流と、2回実施される。また、週に3～4時間、英会話の授業が現地スタッフによって行われている。現地校との交流は、「英語」で行われるため、英会話スタッフに協力してもらいながら、交流に必要な言葉や表現を身に付け、当日の活動に臨むことになる。あいさつ程度は、通常の英会話の授業の中で習得しているので、計画した交流で必要な言葉・表現を準備することとなる。

訪問交流は、相手校の企画で進められるため、事前にグルーピングしておく程度の準備となる。あとは、実際に訪問して、相手の説明を聞きながら交流を深めていくこととなり、その場で臨機応変に動くことが要求される活動であった。従って、低学年の場合は、教師の支援が多くならざるを得ない。高学年になるにしたがって、児童が自分で考えて活動する割合が増えてくる。

ここでは、招待交流について紹介することとする。

3. 実践例 1年生（QIFA小との交流） 2010年度

(1) 前日までの準備

訪問交流が先に実施されていたため、その時にグループ活動したメンバーと同じグループを作って交流することとした。少しでも知っている相手と交流する方が、「話しやすい」雰囲気になるまでに短時間で済むからである。低学年の交流であるため、遊びながら一緒に過ごすことを活動の中心とした。だれもが参加できる遊び（ゲーム）であれば、たとえ話すことが苦手な児童であっても、楽しい時間を共有することが可能だからである。話すことが得意な児童には、話す機会が多くなる活動であり、苦手な児童にはジェスチャーやマイムで相手と交流することができるゲームとして「すごろく」を行うことにした。

生まれた時からシンガポールで生活していた児童や、シンガポール人、外国人の児童には、すごろくはなじみのない遊びであったため、そういった友達にすごろくを教える一緒に遊ぶためにはどんな表現が必要かを考え、それ

を英語ではどう言ったらいいのかを英会話スタッフに聞きながら、オリジナルのすごろくを作っていた。

(2) オリジナルのすごろく

すごろくにつきものの表現、例えば「振り出しにもどる」「1回休み」といった表現はすぐに考えることができたし、英語で表現することもすぐにできた。しかしながらそれ以外の自分たちで考え出した‘交流に有効なミッション’は、なかなか英語で表現することはできなかった。そこで、英会話スタッフに協力してもらって、どういえば現地校の友達に伝わるかを教えてもらった。自分たちで英語に直せるものはグループごとに自分たちの言葉で英語にしていた。実際にはその方が、使える表現となりうるからである。

児童が考えた、交流に有効なミッションの例

- ① マジュラシンガプーラ（シンガポール国歌）を一緒に歌う。
- ② 腕を組んで回る。
- ③ ペアの相手のことをグループのみんなに紹介する。
- ④ 2人でなわとびをする。 など

児童が考えたミッションの中には、英語になりづらいものもあり、英会話スタッフが話し合って、これぞ！という英語表現に直すものもあった。例えば、「両手でハイタッチをする」というミッションで、児童は「ハイタッチ」と言おうとしたのであるが、これは英語表現にはない。他には「Clap hands」を考えたが、これでは「拍手をする」という意味になってしまう。では、どう言えばいいのか。英会話スタッフも悩んだ表現であった。英会話スタッフ数人が話し合い、マザーグースの中の「Pat-a-cake」という表現を見付けてくれた。私たちがよく使っている「ハイタッチ」では決して通じないのである。

自作のすごろくで何度も遊び、「遊び方」に十分に慣れて当日の活動に備えた。

(3) 当日の活動

訪問交流で出会った現地校の友人と再会し、名前や顔を確認し合って教室へ案内した。3～4ペアで1グループとなり（日本人学校児童1名とQIFA小児童1名で1ペアをつくる）、それぞれのグループが自作したすごろくを楽しんだ。当日も、英会話スタッフが協力してくれ、困っている児童やグループには手を貸して、交流がスムーズに進むようにしてくれた。英語で話すことが得意な児童が交流をリードし、それほど話せない児童は、マイムやジェスチャーで補うなど、一人一人が自分なりに交流を深めることができたようである。

(4) 他学年の交流

1・2年生はQIFA小と、3・4・5年生はHenry Park小・Radinmas小と、6年生はJurong小・NUS（シンガポール国立大学）の学生と交流する。また6年生は修学旅行としてマレーシアへ行き、現地のカンボン（村）でショートステイをしたり、小学校訪問をしたりもする。

それぞれの学年で、様々な交流を企画し実践している。2010年度には、外国語活動の一活動として、5年生もNUSの学生との交流が新たに企画された。

① NUSの大学生との交流（6年生）2008年度

「食文化」をテーマに、昼休みに大学のキャンティーン（食堂）に出かけていき、好きな食べ物やシンガポール名物の美味しいところはどこの店か、などを尋ねていた。事前の打ち合わせは全くなく、食事中の大学生にグループ数人が押しかけ、「突撃インタビュー」のような形で自由に質問してくるものであった。当然、返事を断られることもあったが、それでも児童だけの力量で話をしてこなければならず、いい緊張感と、話ができたと、という感激が得られる活動であった。

② NUS大学生との交流（6年生）2009年度

それまでの活動では、話が苦手な児童は話しをしないままで終わってしまうことが予想されたため、もっと大学生と深く関わる活動を模索した。

そこで、NUSで日本語を学んでいる学生との交流を考えた。大学生にとっては日本語を実践する場となり、児童にとっては、英会話の実践と現地の人との交流を図る場となる。NUSの大学生にとっても、語学を勉強しても実践の場がなくて物足りないと感じていたようであり、幸運にも両者の願いが一致して実現することができた学習活動であった。

英会話が苦手な児童にとっては、「日本語」での交流をめあてとすることができ、英会話が得意な児童は、英語で大学生にインタビューしたり話をしたりして、交流を図った。6年生は4～5人で1グループとなり、そこへ大学生2～3名が加わって1チームとなり、NUSの構内を大学生の案内で自由に回ることとした。クラブ活動や運動場に案内されたチームもあれば、学内博物館や図書館に案内されたチームもあり、それぞれが異なる事柄を題材に交流を深めた。児童は、大学生に対して、大学生が考える、シンガポールの名所や自慢を聞いたり、日常不思議に思っていたことを質問したりした。児童がインタビューする場では「英語」を使い、大学生が構内を案内するときには「日本語」を使うことを原則としたので、どちらも十分に目的を果たすことができた。

大学生の中には、他国からの留学生も大勢含まれていたもので、シンガポールだけにとどまらず、世界の様々な国について話をしてもらうことができた。

4. おわりに

5・6年生に関しては、これまで総合的な学習の時間として活動してきたが、2011年度からは外国語活動との関連を図らなければならなくなり、ねらいや方法について、検討する必要があるが出てきた。また1～4年生については、限られた（より短い）時間数の中で発達段階に応じた中身の濃い活動を企画・準備しなければならなくなってきた。

現地校との交流は、国際理解教育であると同時に英会話の実践の場でもある。児童もとても楽しみにしている学習活動である。効果的で質の高い内容を考えていくことが大切である。



<6年生 修学旅行先の小学校で>